

## 国際融合医療協会第7回学術大会

日時：2017年6月18日(日)

住所：東京都文京区湯島1丁目5番45号 会場：東京医科歯科大学歯学部第2講義室

講演会 9:00～17:00 〈参加費 5,000円〉

懇親会 17:40～19:40 〈懇親会費 4,500円〉

大会長 西原克成先生 日本免疫病治療研究会会長

テーマ：エネルギーと物質の統合による新しい融合医学  
～重力進化学を樹立すれば迷宮の免疫学が革新され、  
治る医学が復活する～

ヒトマイクロバイーム(人微生物菌叢)の細胞内感染症とバイオメカニクス(生体力学)と量子物理学【空間と時間・エネルギー(重力・光・熱)と物質の関係】をつまびらかにしましょう。そのうえで、脊椎動物の進化学を究め、冷血動物と哺乳動物の体のしくみを比較しただけで、難病発症の謎も解け、対処法も解ります。

国際融合医療協会理事長 廣瀬輝夫先生

「西洋近代医療と東洋伝統新興医療、健康食品との融合基準」

近代医療に東洋医療と日本独自の医療の融合により強化することが医療介護費の削減にも繋がる。その為には不適切な医療介護手技や安全で有効性が証明されていない薬物や健康食品を排除することが肝要であり、証拠に基づいた医療(EBM)による証明や症状、血液像、骨髄像、バイオマーカー、腫瘍マーカー、尿尿検査、感染菌培養、免疫力などの改善がない場合は採用すべきではない。

INTEGRATED MEDICINEを著者が統合医療と翻訳したのは誤りと気づき融合医療と改めたのは、統合は不安全で無効な手技、薬物、健康食品も選択せずに近代医療と共に使用しており、種々の邪教、暴力団の経営する企業による介入などの弊害が起こる可能性が高い。どの様なものを採択するべきかを今回日本の融合医療のあるべき姿を検討したいと思う。

また閉会后、懇親会もごさいますのでお気軽にご参加ください。



国際融合医療協会 事務局

〒169-0074 東京都新宿区北新宿1-8-1 中島ビル2階

TEL:03-3368-7589 FAX:03-3368-7455

E-mail:info@niwa-clinic.com

## 【学術大会講演内容】 ～学術講演者は各分野の専門家と第一人者～

近年、社会保障費(医療・介護・福祉)の高騰が問題となっている。

原因として高齢化・疾病の複雑化・社会や環境の変化等があげられるが、医学の進歩にもかかわらず病気が治りにくくなっている感も否定できない。

この問題を解決する為には病気が根本的に治る医療が不可欠である。

医療が高度化・細分化の一途をたどる中で、人間を多面的(解剖学、発生学、栄養学、心理学等)にとらえ、総合的にみる融合医療はますます重要となってくるであろう。

これらのことを考慮し、次の5つをテーマとして掲げ、今大会を開催する。

1. 病気を根治的に治す方法論とシステムの構築
2. 健康食品の現在の状況
3. 食膳療法で癌の治療と健康増進
4. 快活な健康寿命と融合医療の役割
5. 理想的な介護とそのシステムは如何にあるべきか

### ●大会長講演

西原克成先生 日本免疫病治療研究会 会長

「エネルギーと物質の統合に基づく学際的融合医療による新しい  
医学・生命科学の創始」

～重力進化学を樹立し、身体のしくみを明らかにすれば

自己非自己の免疫学が革新され、治る西洋医学が復活する～

### ●融合医療

廣瀬輝夫先生 国際融合医療協会 理事長

「近代西洋医療と東洋伝統新興医療、健康食品との融合基準」

丹羽正幸先生 社団法人丹伎会 丹羽クリニック 院長

「自然治癒能力を高めて皮膚疾患を治す」

～古代の叡智と近代科学を用いた融合医療的治療～

### ●健康食品

信川益明先生 健康食品認証制度協議会 会長

「健康食品の品質・安全性確保の重要性

～健康食品認証制度協議会と第三者認証機関の役割～」

臼杵孝一先生 一般社団法人日本栄養評議会 理事長

「健康食品を取り巻く環境と表示制度の変遷」

### ●食膳療法

済陽高穂先生 西台クリニック 院長

「癌の予防・改善の食事」

菊地良一先生 和法薬膳研究所 代表

「高ミネラル無農薬米」

～玄米を深炒りすることで $\alpha$ グルカンとセラミドを発生～

### ●快活な健康寿命（自然治癒力を用いて）及び一般への融合医療への普及活動の方法

志田信男先生 東京薬科大学 名誉教授

「融合医療の主体は誰かー情報過多時代の実存的選択としてのセルフメディケーション  
ー自然治癒力と医療」

田代順孝先生 千葉大学 名誉教授

「地域におけるヘルシーライフスタイルと緑環境の意義」

### ●介護

柴田範子先生 NPO 法人 楽 理事長

「認知症の人へ出会い、人生の最期までにかかわる」

～家族を支えながら、個人に向き合う～